臨春閣

歴史を伝える

臨春閣はかつて大阪・此花区にあった「八州軒」という建物を、原三渓が改造を加え移築し、現在の姿になりました。移築完了後大正６年には長男・善一郎の結婚披露宴を執り行うなど、原家の生活における重要な意味を閉める場所として大切に使われ守り続けられ、その思いは現在にも引き継がれています。

かつては「豊臣秀吉が建てた聚楽第の遺構」と考えられていたことから「桃山御殿」と称されていた臨春閣を、三渓は秀吉ゆかりと伝わる工芸品などで室内を飾り、もてなしの場などとして活用していたとされています。

※その後戦後の調査により「聚楽第遺構説は否定されました。現在の文化庁目録では戦後調査に基づいた「紀州徳川家初代・頼宜が建てた紀の川沿いの別荘建物」と言う説が採用されています。

第三屋古写真 ▶
左：天楽の間
右：次の間

◀ 第二屋「住之江の間」古写真

上：長男・善一郎の結婚披露宴（大正６年）
下：三渓の葬儀（昭和 14 年）

◀ 第一屋古写真「台子の間」

▲ 臨春閣を臨む、100 年変わらぬ景色。

玄関棟裏側。かつては花頭窓だった。 ▼

玄関棟正面側。戦災で倒壊したため、現在の物は昭和の復旧修理事業時に新築されたもの。細部のデザインが異なる。 ▼